

平成 29 年度 Let's びぎんプロジェクト 活動報告書

No.	プロジェクト名	掲載頁
1	はまらんせ〜！プロジェクト in 下和野	1-3
2	がんちゃんパレードプロジェクト	4-11
3	冬だ！雪だ！キャンプだ！	12-20
4	もぐもぐいわて	21-23
5	環境保全学習会〜池干し〜	24-29
6	ひととまちを音楽の力でつなごう！	30-38
7	みんなで伝える地域の宝〜茅葺き古民家活用を目指して〜	39-45
8	作ろう・残そう・岩手の自然史	46-50

平成 29 年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：はまらんせ～！プロジェクト in 下和野

1. 構成員

名前	学部・学科	学年
三浦 賢太郎	理工学部 システム創成工学科	1
及川 雅貴	理工学部 システム創成工学科	1
吉川 慶彦	理工学部 システム創成工学科	1
藤田 颯	理工学部 システム創成工学科	1
外館 咲希	農学部 共生環境課程	3
奥田 綾	農学部 共生環境課程	3
神尾 真大郎	農学部 共生環境課程	3
相馬 晃平	人文社会科学部 法学経済課程	3
阿部 千乃	教育学部 学校教育教員養成課程	3

2. 活動目的

プロジェクト開始前にも住民同士のコミュニティ形成支援に携わっていたが、高齢者の参加が多く若い世代の参加が少ないことが課題であった。若い世代の参加が多くなるよう、子供向けの企画や親子で参加できるような企画も考え、世代間交流に焦点を当てたコミュニティが形成されること、企画段階で若い世代にも加わってもらい、共に企画を考えることで高齢者に代わって住民を統率していく意識を高めることを目的とした。

3. 活動の経過・内容

- ・8月 夏祭り 流しそうめん、さんさ踊り
- ・2月 冬の下和野パーティー お昼(うどん)振る舞い、すごろく

※各イベントの実施前に、自治会長様等との事前相談を重ねた。

4. 結果報告

現状として、そもそも下和野団地の住民は若い世代はかなり少ないことが分かった。災害公営住宅に入居していたとしても後々に自宅を再建し、住宅からどんどん退去していつている。若い世代と高齢者との世代間交流をさらに活性化していくのであれば対象を災害公営住宅のみにとどまらず、広い地区が対象となるのではないかと考えられる。もしくは災害公営住宅内のコミュニティ形成に集中するのであれば高齢者の参加が多くともやむを得ず、より多くの住民の参加を期待しようとする。活動のコンセプトを再度見直す必要がある。

活動目的から今回の活動について振り返ると、当日の若い世代の参加は増えてきている。若い世代の企画段階でのかかわりはなく、私たちも企画段階から参加して共に考えてもらうように働きかける必要があった。ただ、若い世代に住民を統率していく意識があるかどうかについて私たち学生は深くまで介入することは難しいと考える。活動をしていく中で様々な問題に直面しているが、学生ができることに絞りそれを実行していきたいと考える。

5. 今後の活動予定

開催頻度は年に2回で1つのイベントに開催日をいくつか設けて参加しやすい環境をつくる。活動のコンセプトをまず話し合う。

6. 活動写真



平成29年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：がんちゃんパレードプロジェクト

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

NO.	氏名	学部	学科課程	学年	備考
1	山口茜里	総合科学研究科 総合文化学専攻	アート発信プログラム	M1	企画代表
2	朝倉美優	総合科学研究科 総合文化学専攻	アート発信プログラム	M1	企画副代表
3	阿部千秋	教育学部	芸術文化課程 美術・デザインコース	4	企画運営
4	竹田なずな	教育学部	〃	3	企画運営
5	高橋茉由	教育学部	〃	4	イベントサポート
6	斉藤	教育学部	〃	3	イベントサポート
7	菅原憲吾	教育学部	〃	3	イベントサポート
8	吉田翔	教育学部	〃	3	イベントサポート
9	伊藤	教育学部	音楽コース	3	楽曲制作
	小畑	教育学部	〃	3	
	田邊	教育学部	〃	3	
	檜山	教育学部	〃	3	
	三浦	教育学部	〃	3	

2. 活動目的

- ①岩手県内においてマスコットキャラクターを持つ学校機関は岩手大学のみである。このキャラクターを大学の持つ無形の文化資源として有効活用し、地域との連携のきっかけを学生主体で作る。
- ②文系分野の研究活動の成果を地域住民に楽しんでもらう形で発信する。
- ③観客として参加する学外の市民へ学びのきっかけを提供する。これから進学する幼児、小中高生だけでなく、大人にも生涯学習へのきっかけとなるような場面を作る。
- ④着ぐるみをはじめがんちゃんグッズを学生が制作しパッケージ化することで来年度以降も継続して利用する。
- ⑤このプロジェクトを通じて異なる学部間での連携をはかる。これにより今後の研究活動において、他分野との共同作業などが有効に行われることを期待する。

3. 活動の経過・内容

8月 決起集会

10月 着ぐるみ模型制作

美術科の田中先生、平野先生の指導を受けイメージを作った。

11月 制作開始

美術科の藁谷先生の指導を受け、実際の作業に取り掛かった。

オリジナル曲の作詞

12月 着ぐるみ制作、テーマソング作詞

1月 着ぐるみ完成

2月 テーマソング作曲

音楽科の牛渡先生・大葉先生の協力、指導を受けて音楽科チームで制作し録音した。

3月 がんちゃんすくすく保育園入園式参加

合格発表参加

4. 結果報告

①がんちゃん着ぐるみ・テーマソング2曲完成

②がんちゃんすくすく保育園入園式参加

入園式のセレモニーもオープニングオープニングとして音楽演奏とパフォーマンスを行った。セレモニーに参加した学校関係者、園児に好評だった。

③合格発表参加

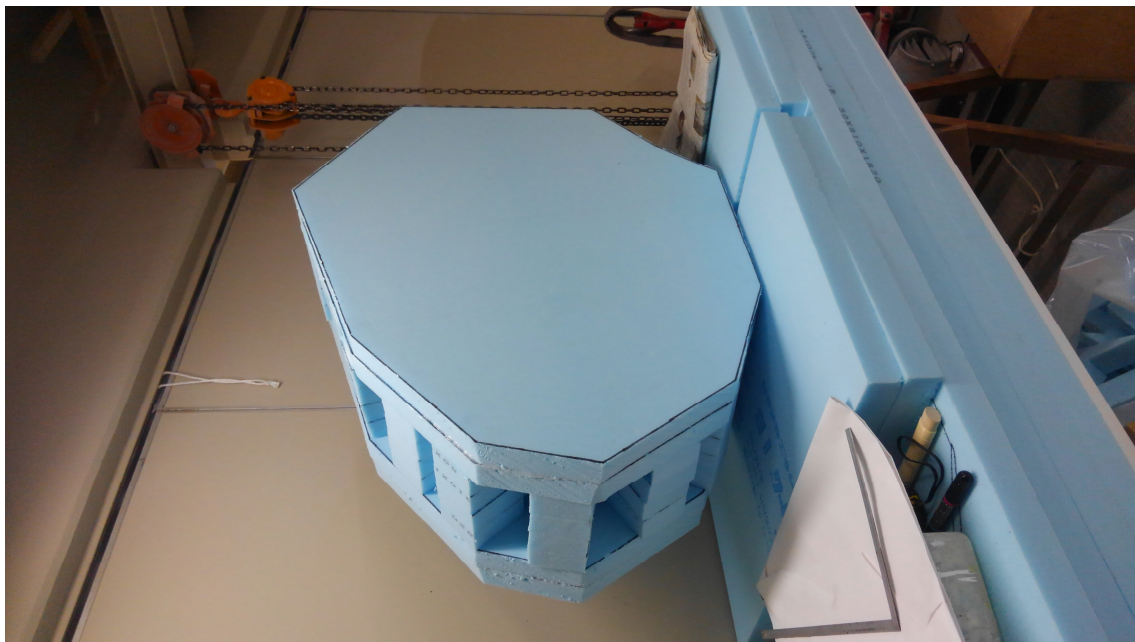
合格発表に合わせて演奏とパフォーマンスを行う。写真撮影を希望する受験生と記念撮影も行った。IBC のニュース内で、インタビューを受ける学生の後ろにうつる。新入生だけでなく、学外の人の目に触れる機会となった。

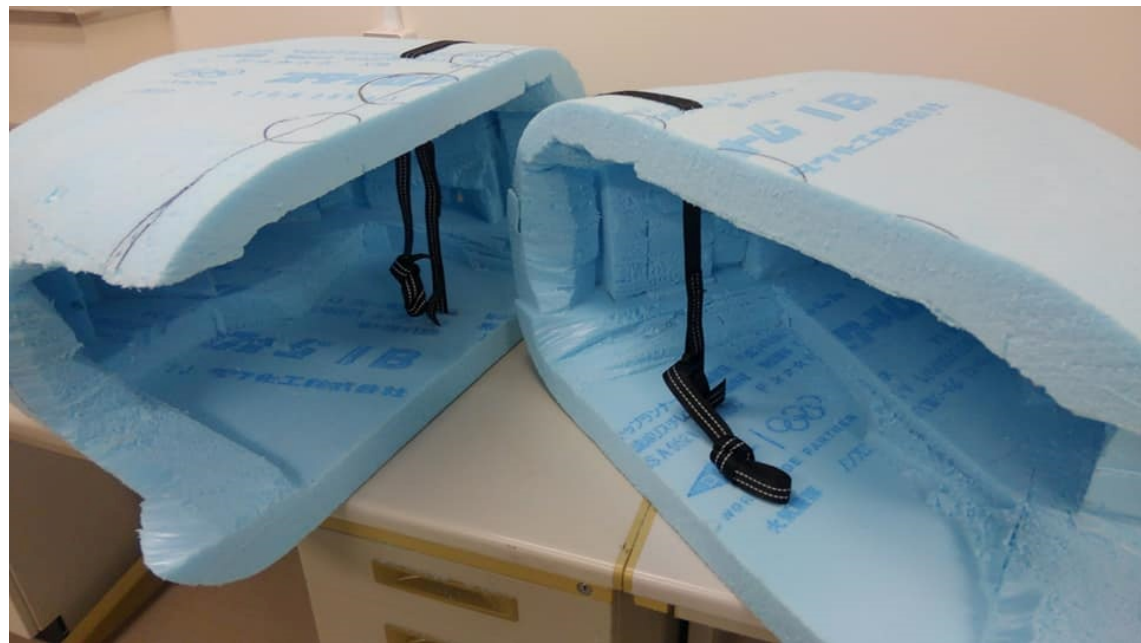
5. 今後の活動予定

がんちゃんパレードプロジェクトの活動はこれで終了するが、今回制作した着ぐるみは今年度の学祭での利用を検討している。着ぐるみは2回のパフォーマンスをして、少しずつ劣化してきており、あと2, 3回くらいしか利用出来そうにない。よって今回制作した着ぐるみはあくまで今後の着ぐるみ制作のひな型となるもので、今後も継続して利用することは出来ないと判断した。そこで、学祭の実行委員会に着ぐるみを寄付し、1年案で学内の利用に制限することで可能な限り利用したいと考えている。

6. 活動写真
制作風景

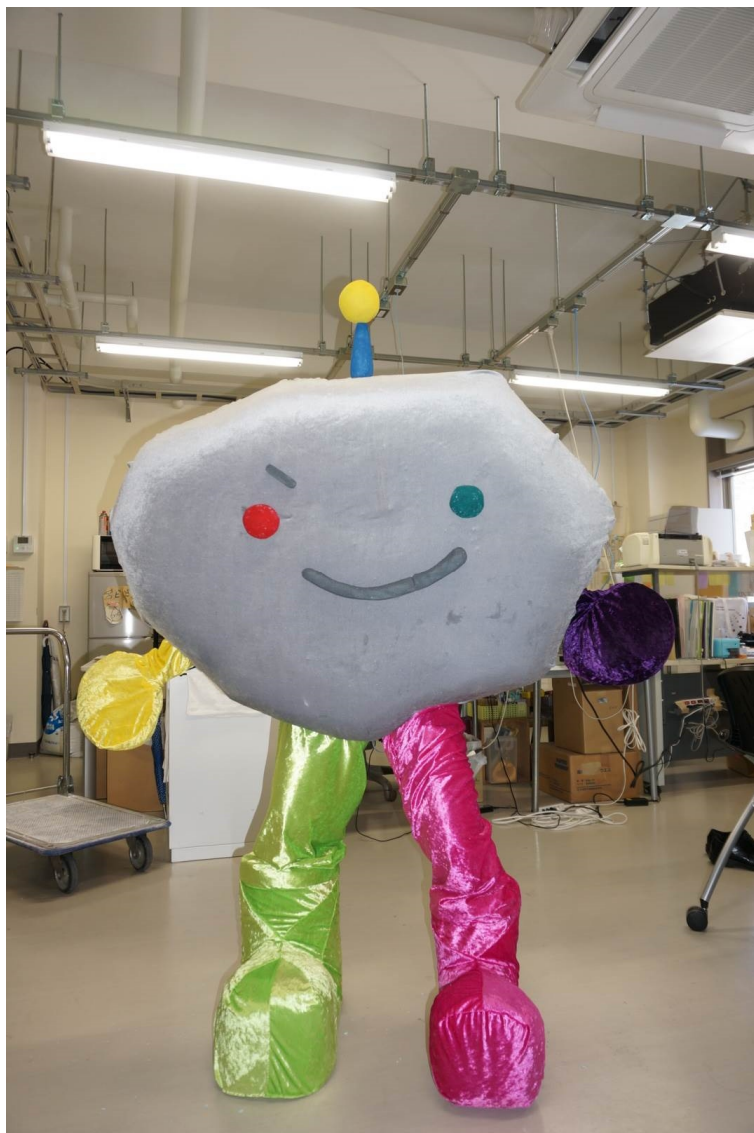








完成したがんちゃん着ぐるみ



平成 29 年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：冬だ！雪だ！キャンプだ！

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

菊池 紗江	教育学研究科 教職実践専攻	1 年
門脇 日向	農学 共生環境課程	3 年
木村 愛	教育 学校教育教員養成	3 年
高橋 長仁	農学 共生環境課程	3 年
立花 春香	盛岡大学 文学部 英語文化学科	3 年
千葉 大貴	教育学研究科 教職実践専攻	1 年
千葉 瑞希	教育 学校教育教員養成	3 年
光成 芳	教育学研究科 教職実践専攻	2 年
村田 雄大	教育学研究科 教職実践専攻	1 年

サポートメンバー

鈴木 孔明
衛藤 優
山家 直之
遊佐 瞳
鈴木 亮平
河合 誠雄

2. 活動目的

山田町・盛岡市に住む、小学 4 年生～中学 2 年生の児童生徒を対象に、「雪・冬」をテーマにしたキャンプを行う。

〈山田町 設定理由〉

設立メンバーのほとんどが、もともと SAVE IWATE の学習支援チームとして山田町・盛岡市で復興支援活動を行っていた仲間である（2016 年 3 月 SAVE IWATE 学習支援チーム解体）。山田町と深く関わりをもった中で、山田町の子どもたちが山田町以外に出て活動をする機会の少なさを感じた。また、メンバーの中には山田町の出身者もあり、そのような機会の少なさは山田町にいる時も感じていることであった。

住む町・年齢の違う、初めて出会う子どもたち同士がキャンプをすることで、仲間とのコミュニケーション能力や自分の思いを発信する力、異なる他者と協働したりする力、リーダーシップ等を、子どもたちに身につけてほしいと考える。キャンプを通し、普段の自分とは新しい自分を発見し、みんなの前で自分の思いを伝えることができる、消極的な気持ちから一歩踏み出せるような自信をつけることができるキャンプを作り上げたい。

これから、次世代を担う子どもたちに備わってほしいのは、たくさんの経験から培われる「生きる力」であると考えている。このキャンプを通し、目標をもって体験活動にチャレンジしてほしいと思い企画した。

また、この企画は、昨年度もこのプロジェクトにおいて採択をいただいたものの、山田町からの参加者を集めることができず、開催することができなかった。今回、再び採択をいただくことができたため、キャンプの周知のチラシを増やしたり、山田町での事前取り組み（私たちの団体・活動を知ってもらうため／親からの意見集め、キャンプに子どもたちを送り出す際に心配なこと等）を行ったりすることで、昨年度の取り組みの改善を行おうと考えた。また、安全面についても、昨年度よりいっそう細かい配慮をできるように、と考えて企画した。

3. 活動の経過・内容

5/10 ミーティング （昨年度の取り組みでの反省等確認）

5/31 ミーティング （今年度の取り組み等）

↓ 採択決定期間まではネットを使っての話し合い

8/19 ネットミーティング （キャンプ事前活動として何を行うか）

8/20～ 事前活動 何を行うか、今年度のキャンプに向けての確認事項

9/28 ミーティング （事前活動決定 「ピタゴラ装置をつくろう」 スケジュール決定）

↓ ピタゴラ装置 試作・材料集め等

10/26 事前活動を行う山田町「はびね」にてミーティング

↓ ピタゴラ装置 試作・材料集め等

11/25 「ピタゴラ装置を作ろう」ワークショップ

チラシ配布準備 （盛岡市内全小中学校 山田町内全小中学校）

12/12 小中学校 冬休み前に合わせてキャンプのチラシ配布

1/4 キャンプの二次案内配布 二次募集（山田町内児童センター）

↓ キャンプ準備 （健康調査票回収等）

2/7 ミーティング （当日動き等役割分担）

2/17 保護者説明会

2/22 最終ミーティング

2/23 山田町 前のり

2/24-25 キャンプ

〈キャンプ事前活動 内容〉

ピタゴラ装置を作ろう ワークショップ 11/25 13:30～15:30

- ・対象年齢 小4-中学生 (対象年齢以下は大人と一緒に参加)
- ・材料を選んで作品にできる形式で行った
- ・作った作品は持ち帰ることができるようなものにした

〈キャンプ内容〉

- アイスブレイク
- 雪の中でアイスクリーム作り
- 雪だるまつくろう
- そり遊び
- 冬・雪の実験
 - ①ペットボトルで雪の結晶を作ろう
 - ②ダイヤモンドダストを作ろう
- わがまち自慢
 - ～山田町・盛岡市 自分の住む町の良さを伝えるポスターを作り、発表し合おう～

4. 結果報告

11/25 ピタゴラ装置を作ろう

3歳～中学2年まで 計 25人

【大人の方々からのご意見等】

<ピタゴラ装置を作ろうについて>

- ・山田町で行ってくれる活動は気軽にこれるから良い
- ・子どもたち向けの工作ワークショップが珍しく楽しそうと思い参加した
- ・家でも楽しめそう

<キャンプについて>

△子どもたちが楽しいと思えるようなキャンプだったら良い

△移動時間に3時間以上かかるのは、冬道が心配

△一人で泊まりに行かせるのが心配 親も同伴だったら少しは軽減されるかも

【子どもたちからの感想】

- ・楽しかった、持って帰れるから嬉しい
- ・あっという間だった
- ・今度はみんなで大きな作品を作りたい

2/24-25 冬だ！雪だ！キャンプだ！

小学4年～中学1年 計 7人 (山田町 2人・盛岡市 5人)

学生スタッフ 4人 院生1人 大人サポートスタッフ5人

【子どもたちからの感想】

＜山田町からの参加＞

・最初の日からみんなと楽しめて良かったし、雪遊びとか実験とかも楽しかったので、実験も家でやってみたい。

・最初は全然仲良くなれなさそうで不安だったけど、すぐに仲良くなれていろんなゲームもできた。おしゃべりもたのしかったし、ダイヤモンドダストもきれいで、家でやってみたいとおもった。

＜盛岡市からの参加＞

・初めてみんなと会ったけど、1日目から仲良くできたし、雪遊びなども楽しかった。

・全部面白かった、またいきたい

・アイス作りがとても楽しかったしとてもおいしかった。

5. 今後の活動予定

どのように活動をしていくかの協議

→・活動資金 今回 Let's びぎんの資金でまかなってもらえた大きな部分がバス代であった。今後、バス代までの集金を行うと、今回のように参加費 2500 円ではとうてい難しい。今回と同じ内容で続けていくとなった際、どのように資金を獲得していくかが課題である。

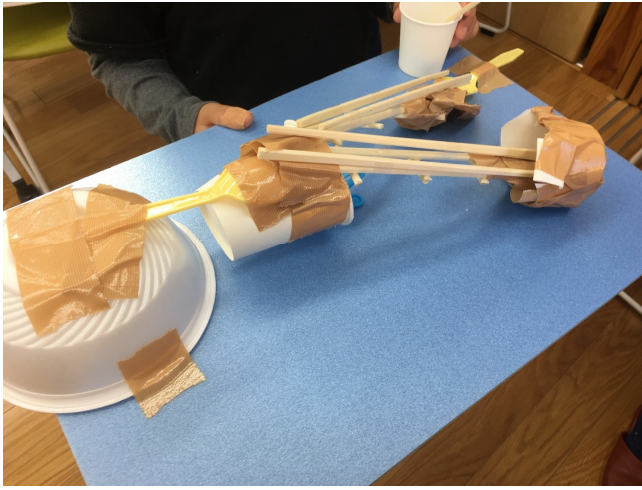
・活動内容 山田班の子どもたちに「なぜこのキャンプに来てくれたか」を聞いたところ、「楽しそうだった」という意見であった。シンプルだが、大事な意見であると感じる。これからも、こどもたちの「面白そう」が一番にくるような活動でありたい。その中で、山田の子どもたちからは「スキーやスケートはできないのか」という意見があった。今回、盛岡⇄山田での交流を行いたい、という思いがあったため、レベルや経験に技術が偏ってしまうスキーやスケートは内容からは外したものの、意見として取り入れた際、どのように生かしていけば良いかは考えていかなければならない。そもそも「交流」をさせたい思いはあるものの、その「交流」を子どもたちがしたいと思うのか、そんな取り組みを作っていくことができるのか、という部分にも関わってくる。

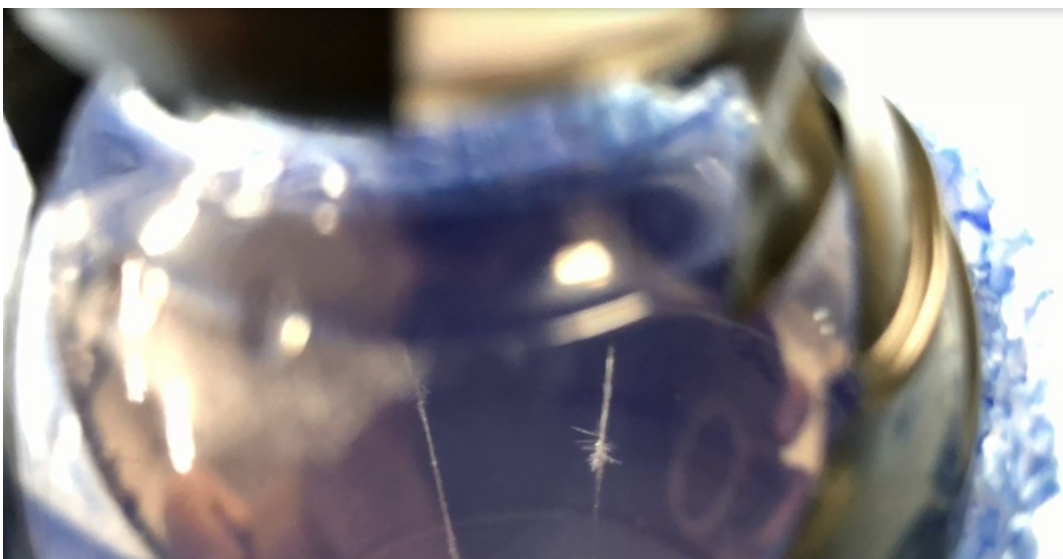
また、これから持続可能な取り組みとしていくためには、ピタゴラ装置ワークショップのような、キャンプよりも準備が行いやすい、

活動資金がキャンプほどかからないものにしていった方が良いのか、という意見もある。メンバーも来年は卒業年であるため、どのように活動を行っていくか、他の団体とつながることも考えながら今後の活動を考えていきたい。

6. 活動写真









平成29年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：もぐもぐいわて

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

- ＊荒谷 光司（教育学部・学校教育教員養成課程・4年）
- ＊大久保彩音（教育学部・学校教育教員養成課程・3年）
- ＊安田 奈央（教育学部・学校教育教員養成課程・3年）
- ＊沼崎 悠華（教育学部・学校教育教員養成課程・2年）
- ＊山口 京華（教育学部・学校教育教員養成課程・2年）
- ＊伊藤 玲杏（教育学部・学校教育教員養成課程・1年）
- ＊北川 莉帆（農学研究科・応用生物化学課程・2年）

2. 活動目的

県産食材を使ったメニューや、郷土料理をアレンジしたメニューを岩手大学から発信・提供することで、岩手大学生や食堂利用者に地産地消の安心・安全さ、おいしさを知ってもらうため。また、岩手の食文化にも関心をもってもらうため。

3. 活動の経過・内容

8月：勉強会

（県産食材の調査、郷土料理の調査、他大学での取り組み調査、メニュー案の作成）

9月：試作2回実施（合計6品作成）

10月：勉強会〔講師：岩手県・食の匠 安藤さん〕（合計5品作成）

11月：12月試食会準備（メニュー決定、アンケート項目検討、試作）

12月：第1回試食会（20名程度対象）、アンケート集計・アンケート結果の検討

1月：2月試食会準備（試作、試食会の案内）

2月：第2回試食会（40名程度対象）、アンケート集計・アンケート結果の検討、
まとめ

4. 結果報告

勉強会や試作、試食会を通して、県産食材や郷土料理についての知識を深め、メニュー開発につなげることができた。また、試食会を2回実施し、そこで得られた意見をもとに、レシピの修正を行うことができた。

5. 今後の活動予定

現在、レシピ集の作成に取り組んでおり、完成次第、本報告書とともにレストランや食堂の方にお渡しするとともに、メニューの提供について再度提案する。

また、来年度（30年度）も本活動を継続したいと考えているため、支援課との協力など、来年度の活動内容（方法）について検討していく。

6. 活動写真

10月 勉強会の様子



岩手県・食の匠 安藤さんからお話を伺う



第1回試食会 発表の様子



第1回試食会 試食の様子



第1回試食会感想発表



第2回試食会 準備の様子



第2回試食会 メニュー



第2回試食会 発表の様子



平成29年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：環境保全学習会～池干し～

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

	学部	課程	学年	氏名
1	農		教授	廣田純一
2	農		教授	東淳樹
3	農	総合研究科	M1	大竹崇寛
4	農	共生	4	高橋千尋
5	農	共生	4	平門由佳子
6	農	共生	4	三浦優
7	農	共生	3	飯塚珠恵
8	農	共生	3	田中美優
9	農	共生	4	中村恵
10	農	植物	2	佐野広之
11	農	植物	2	高橋弘樹
12	農	植物	2	橋本遥介
13	農	食料	1	佐々木萌
14	農	獣医	1	澤田康平
15	農	獣医	1	高橋貫生
16	農	獣医	1	相澤葵
17	農	獣医	1	北島ちひろ
18	農	森林	1	小林理乃
19	農	地域創生専攻	M1	太刀川晴之
20	農	共生	4	八矢園子
21	農	応用生命	2	伊藤望
22	農	森林	1	小室芽衣
23	農		M1	中村哉人
24	教	英語	3	川井田直人
25	農	森林	1	小松朋永
26	教	家庭	3	阿部千乃
27	農	共生	4	寺井翔啓
28	農	食料	2	佐藤至
29	農	森林	1	佐々木真輔
30	農	共生	4	関本あすみ
31	農	共生	4	浅利勇太

2. 活動目的

岩手県奥州市胆沢区にある内田ため池の保全活動をしている。しかし、活動対象のため池の水質悪化や水際が拡張している。水質の改善、ため池の整備の際に、生物の引っ越し作業、維持管理を地域の子供たちと一緒に行うことで、ため池周辺の生態系を守り、環境教育を行うことを目的としている。

3. 活動の経過・内容

7月2日、8月6日 事前観察会実施、ギバチ、モツゴ、メダカ、エビなど観察、調査

8月10日 生き物のお引っ越し・池干し

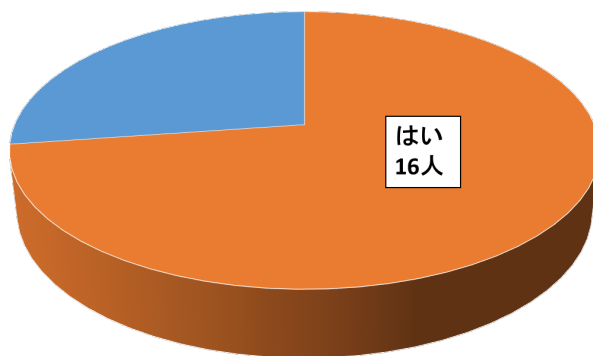
8月11～10月14日 事業者がため池整備工事を進めている間、回収した生き物を大学、奥州市、土地改良区で飼育・管理

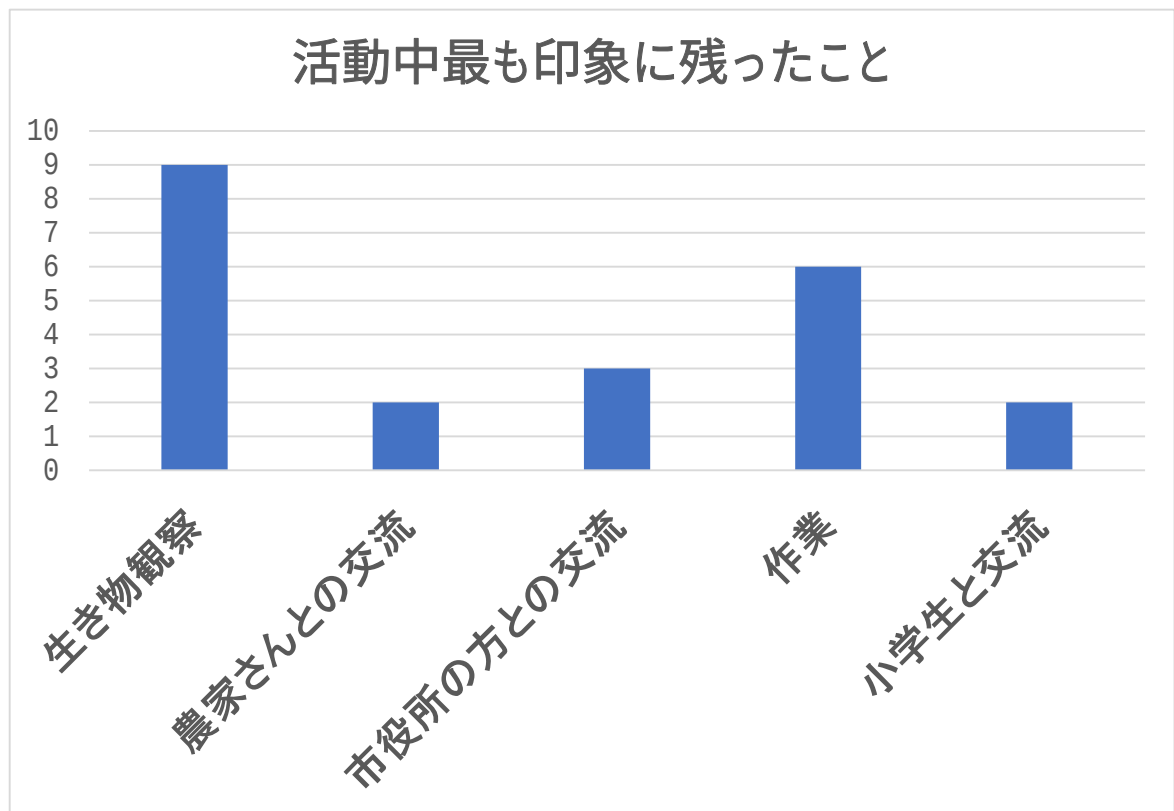
10月15日 生き物の放流

4. 結果報告

地域みなさんと大学生が協力して池干しプロジェクトを成功することができた。今活動によってため池は修繕され、そこに生息する生き物の種類や個体数を調査することができた。また、日本固有の希少種もいることから、これからも生態系の維持に努めたい。池干し作業をしながら回収した生き物を地域の子供たちと一緒に観察・分類できたので、さらに子供たちはため池への関心が高まったと感じた。日本に姿を消しつつあるため池とその周辺の環境を今後も保全していく責任を感じるよい成果だった。一方地元と学生との交流は少なかった。生き物好きの学生にとって、やはり生物観察が一番の関心ごとであった。

地域の人と交流できたか(人)





また生き物の世話に課題が残った。以下のように一カ月で大量死した。えさの量や粒の大きさ、水槽掃除にて水の温度変化、池と水道水の水質の違いによるものだと考える。

	預かった数(8/10)	生存数(10/14)
メダカ	40	8
ギバチ	35	20

5. 今後の活動予定

生物観察会は年に一度継続して実施する。池干しは予算の都合上、検討にとどまる。生き物の種類の見分け方、餌やり等の飼育方法を引き継いでいく。

6. 活動写真





平成29年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：「ひととまちを音楽の力でつなごう！」

<報告書必須記載事項>

1. 構成員

代 表 森田 詩緒里(総合科学研究科地域創生専攻1年)
副代表 石黒 ゆかり(人文社会科学部人間科学課程3年)
後藤 マミ (人文社会科学部人間文化課程2年)
平野 未奈 (盛岡大学文学部社会文化学科2年)
坂本 亘 (総合科学研究科理工学専攻1年)
播磨屋 瑛 (工学部電気電子・情報システム工学科3年)

※坂本と播磨屋は基本的に出演者側のため、内部の意見を参考にさせていただく形で参加しておりました。

2. 活動目的

岩手県内に住む人々が、岩手の音楽イベントの特殊性や、それらが岩手を盛り上げる力となる可能性を有していることを認知し、コミュニティ形成の場のひとつとして、もっと気軽にライブハウスを利用するようになるきっかけとなること。

また、ライブハウス自体が「音楽」というひとつの手法を用いた地域振興のアイディア発信の場となるよう提案すること。

3. 活動の経過・内容

・事前調査(インタビュー調査) 2017.6.9

本プロジェクト審査会に向けて、大船渡・宮古・盛岡の3カ所でサーキットイベント「circuit of いわて」を企画した今野直道氏にインタビューを行った。

・アンケート調査 6月～7月

「岩手の音楽イベントに関する意識調査」と題して、学内やライブハウスで調査票調査を行った。分析ソフトには SPSS を使用した。

・フリーペーパー作成 8月～

地元アーティストやライブを行っているお店、大学のサークルなど、岩手の音楽に関わる人々を紹介するフリーペーパーを作成した。配布は10月21日の本学不来方祭から開始。

・ワークショップ「いわての音楽を考える」開催 2018.1.19

岩手大学クロスラウンジにて、大学生向けのトークカフェイベントを開催し、音楽経験者と未経験者、音楽サークル内と音楽サークル外の人同士の意見交流を図った。

・ライブイベント「kanade いわての音楽をすぐそばに。」開催

the five morioka にて、われわれがイベンターとなってライブイベントを開催した。地元の音楽イベントに興味はあるもののきっかけがつかめていない人を中心に、誰でも気軽に立ち寄れるように入場料を無料とした(ドリンク代500円は別途必要)。1月のワークショッ

プで出た意見も参考に、フライヤー設置や告知を広い範囲で行い、会場内にはメンバー募集や企画者募集の模造紙を貼った。当日の出演者や会場内に貼った写真を撮影したカメラマンの方々の Twitter アカウントを QR コード化し、気になったら会場内で即アクセスできるように工夫した。出演者に関しても、ジャンルが偏らないように調整したことに加え、ライブを最初から見に来てもらえるように「いつもどおりの順番」を完全に崩し、普段はトリを務めるようなバンドをトッパーに出して若手をトリにするなど、出順も工夫した。

4. 結果報告

・事前調査(インタビュー調査)

「音楽」というテーマはまちづくり分野においても非常に難しいものであるため、まずは本気でこのテーマでやりたいのだ、ということを示すために行動してみた。審査会において、具体的に事例を挙げて話すことができたのもこの事前調査があつてこそだと感じている。今野氏は沿岸出身者であることから自身の企画にとっても熱い想いを持っており、「自分たちのやりたいこと」と語っていた。今野氏の企画も、今でも他に例のない新しい企画であるため、同じく何かを始めようとする立場のわれわれに多くのアドバイスをくださり、非常に参考になった。自分たちのやりたいことであり、さらにそれに賛同する人が集まってこそ新しいものが作っていけるというご意見は、本企画全体で意識したことでもある。

・アンケート調査

200 部程度印刷し、配布から回収まで行ったのだが、調査票の質問設定そのものに欠陥があったことや分析にかけるまでに必要な値が得られなかったことによりクロス集計までに至らなかった。成功していれば参考にできる要素が多かったので、反省し次回は結果を出せるようにしたい。

・フリーペーパー作成

不来方祭配布から始まり、ライブハウスや大学、お店などさまざまな場所で配布していただいた。イベントなどで配布したものの残部をライブハウスなど別の場所にまわしながら行っていたため、現在も配布・設置中である。不来方祭の配布直後や2月のライブイベントでは特に、普段ライブハウスや音楽イベントにはあまり来ない人がその場で手に取ってじっくり読んでいる場面が見られ、興味・関心につながったと思われる。手に取った方々からは好評をいただき、次回作も出してほしいと声があった。お店に配布した分は、その店内で常設のものが多く、お店を訪れたお客さんが手に取っているようである。インタビューした方々が SNS で紹介してくださったこともあり、直接・SNS 上ともにフリーペーパーを求める声や見つけた！という報告が数多くあった。

・ワークショップ「いわての音楽を考える」

SNS やメールによる申し込みが当日までなかったため不安が大きかったが、会場とともに次々と人が入り、合計 11 人でトークカフェを行った。参加者は、音楽サークルの人はもちろんのこと、アカペラサークルや演劇部、吹奏楽部、まったく音楽経験のない人など、

さまざまな人が集まり、議論も活発だった。内容は、現在の岩手の音楽イベントにおける魅力と課題点から始まり、それに対する改善策、新しいアイディアなど、議論が發展していく流れとなった。特にアカペラの人たちの意見が多く、「サークルの枠を超えて一緒に企画をやってみたい！」など意欲的な発言が多かった。(このワークショップで話したことがきっかけなのか、3月にアカペラ×バンド企画が開催される。) 大きな企画ライブを組んだことがない人でも、やってみたいことや興味のあることはたくさんあり、それを具体化していくきっかけになる日を作ることができたように感じる。当日は、県立大学や盛岡大学など他大学からの参加もあり、今後さらに枠を広げたイベントを定期的にするのであれば、より効果があると考えられる。

・ライブイベント「kanade いわての音楽をすぐそばに。」開催

出演者の方々と始め、フリーペーパーの配布協力をお願いしていたお店やライブ企画を行っているお店など、多くの方々のご協力で成功させることができた。出順など、普段お客さんとしてライブを見ている立場から考えた細かい部分が予想以上の効果を発揮し、宣伝を見て来場した人や当日ふらっと訪れた人などが開始直後から会場を埋めていた。普段のライブイベントでは最初から最後まで満員のままということはめったにないので、70～80名の来場という数字にはスタッフの方々も驚いていた。本来無料イベントというものはあまり存在しないので、われわれが当日に向けていろいろな工夫を考えているのと同様並行的に、出演者の方々も告知を工夫したり、普段あまり来ていない人を積極的に誘ったりなど、同じくいろいろなことを行っていたようである。中には、ほかのライブやイベントでフライヤーを配布したり、当日の開場前に外で呼び込みを行ったりなど、普段の企画ではまずやらないことを進んで行っている出演者の方もおり、関わった人全員で作り上げた企画となった。イベント終了後には、出演者、お客さんともに「自分たちもこういう企画をやってみたい!」「このプロジェクトに携わりたい!」と仰ってくださいの方がおり、今後継続して活動していくことへの可能性を感じた。

また、ライブハウススタッフの方の中には、「大学とこういう風に連携して何かできるということは知らなかったので、今後もっと大学や学生と何かやっていきたい」とおっしゃっている方もいた。

・活動全体を通して

われわれが間に入りながら、関わる人全員でひとつの企画を動かしていく形となったプロジェクトであった。そのため、この1年でより多くの人と関わることもできたし、お互いに新しい考え方や発見を得ることができたように思う。音楽という趣味に近いものごとでも、好きなひとが多ければそれを「手段」として行動し、何かをつくっていけることを実感したので、今後も継続的にこの活動を続けていきたい。

5. 今後の活動予定

今後は Twitter を利用した広報活動を継続的にやり、岩手で活動するアーティストへのインタビューや曲紹介、カメラマンやライブペインターなどライブに携わる人へのインタビューを行い、より多くの人に岩手の音楽の魅力を広めていく予定である。これに際し、今後の活動をいっしょに行っていくメンバーを随時募集することも考えている。盛岡では高校生の活動も活発なので、大学生・高校生で活動を行っていくことができれば理想的である。

また、最近われわれと同じようにイベンターとして企画を行ったり、「アカペラ×バンド」、「大学生×高校生」といった個性的な企画を考えたりする人が増えているので、そうした人たちのサポートをし、連携していければと考えている。さらに、沿岸地域など他地域のライブハウスやお店を巡る企画も実行したいので、メンバーや出演者を募り、準備を進めていきたい。

実行可能かはまだ検討中だが、YouTube などのツールを用いた音楽番組の作成なども案のひとつとして出ている。

6. 活動写真











平成29年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：みんなで伝える地域の宝

～茅葺き古民家活用を目指して～

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

No.	氏名	学部	学科課程	学年	備考
1	中川裕太	農学部	共生環境課程	4	代表
2	神尾真大郎	農学部	共生環境課程	3	副代表
3	太田侑奈	農学部	森林科学科	2	副代表
4	阪野昇平	農学部	共生環境専攻	修士 2	
5	大竹崇寛	農学部	地域創生専攻	修士 1	
6	太刀川晴之	農学部	地域創生専攻	修士 2	
7	大竹阿士	農学部	共生環境課程	4	
8	久門美月	農学部	共生環境課程	4	
9	高橋千尋	農学部	共生環境課程	4	
10	押切智博	農学部	共生環境課程	3	
11	飯塚智崇	農学部	共生環境課程	3	

2. 活動目的

今回の活動対象である古民家は、茅葺屋根や囲炉裏などが残っており、昔の人々の暮らしを伝える貴重な文化財である。

現在は、NPO 法人西和賀文化遺産伝承協会によって維持・管理が行われており、喫緊の課題であった老朽化に伴う雨漏り等への対策を講じてきた。しかし、建物の内外部の老朽化は深刻で家屋内であっても土足で入らねばならない所もあるなど改善の余地はいまだ多くある。

また、現在古民家の利用は、年数回にとどまっており、古民家の利用者の固定化、利用者の減少は、建物の老朽化を及ぼすことから大きな問題となっている。地元 NPO も古民家の利活用を望んでいるが、現状では、資金面・人材面において利用できていない。

上記の現状を踏まえ、本プロジェクトにおける目的を下記 2 点に設定する。

- ① 古民家の活用に向けた基盤を作るため、古民家の修理・補修を行う。
- ② 地域の人や大学生など、多くの人が古民家に関わる機会をイベント企画などを通して醸成する。

3. 活動の経過・内容

日程		活動内容
月	日	
5月	13日	現状視察・打ち合わせ、掃除
8月	22日	掃除
9月	30日	漆喰塗り（廊下）
10月	7～9日	漆喰塗り（じょ居、畳部屋）
	14,15日	漆喰塗り（畳部屋）
11月	12日	萱刈り
活動内容詳細 ○現状視察・打ち合わせ	16日	ウバユリスタンド試作
	18,19日	プロジェクトメンバーが古民家に訪ねたところから、雨天のため、現状視察を行った。現状視察では、本プロジェクト対象古民家を指定管理している NPO 法人西和賀文化遺産伝承協会の代表、会員との打ち合わせを行い、古民家の歴史、現状、課題等基礎情報を聞いたうえで、古民家の修復箇所やイベント実施に関しての話をした。結果、修復箇所として廊下、常居、畳部屋の壁塗り、廊下の板の張替え、障子の張替えが挙げられた。イベントの実施については、記述した修復箇所修繕後、学生メンバー内での検討の上、改めて打ち合わせを実施することとした。

○漆喰塗り

打ち合わせで話し合われた修復箇所である廊下、常居、和室の壁塗りの壁塗りを行った。古民家の内観が文化財としてふさわしい内観なるよう、使用する漆喰の種類・色・塗り直し箇所について指定管理者と打ち合わせを行ったうえで、廊下（9/30）・常居（10/7～9）・畳部屋（10/7～9,14,15）各箇所の壁を漆喰を用いて塗り直した。

○萱刈り

古民家は、10 数年に一度屋根をふき替える必要があり、また、本プロジェクトの実施地域である西和賀町は、県内有数の豪雪地帯であることから冬季期間の雪囲いが必要であることから屋根の葺き替え、雪囲いで使うための萱を刈った。

○ウバユリスタンド作成イベント開催

地域の人や大学生など、多くの人が古民家に関わる機会をイベント企画などを通して醸成するという本プロジェクトの目的達成のため、古民家周辺に生えているウバユリを活用し

てウバユリスタンド作成イベントを実施した。

4. 結果報告

活動目的において以下2点の目的を設定した。

- ① 古民家の活用に向けた基盤を作るため、古民家の修理・補修を行う。
- ② 地域の人や大学生など、多くの人が古民家に関わる機会をイベント企画などを通して醸成する。

① 古民家の活用に向けた基盤を作るため、古民家の修理・補修を行う。

指定管理者との打ち合わせから修復箇所として

- 1)廊下、常居、畳部屋の壁塗り
- 2)廊下の板の張替え
- 3)障子の張替え

の3カ所が挙げられていた。

今年度の活動では、1) 廊下、常居、畳部屋の壁塗りのみを行った。2)廊下の板の張替え 3) 障子の張替えについては、日程が確保できず実施できなかった。

② 地域の人や大学生など、多くの人が古民家に関わる機会をイベント企画などを通して醸成する。

上記目的達成のため、古民家の修繕活動、ウバユリスタンド作成イベント実施の際学内掲示板、知り合いへのイベント情報宣伝を行い参加者を募った。結果、プロジェクトメンバー以外の参加者の協力も得ることが出来たが、多くの参加者がプロジェクト参加メンバーと同じ学部課程であったという課題が残った。

- ① ②以外にも、現状視察・打ち合わせ・掃除、萱刈、有害鳥獣駆除（ハクビシン）を行なった。指定管理者の活動としては、壁の修繕後、古民家植物観察会、お茶会が実施された。

5. 今後の活動予定

本プロジェクトの目的として掲げていた

- ① 古民家の活用に向けた基盤を作るため、古民家の修理・補修を行う。
- ② 地域の人や大学生など、多くの人が古民家に関わる機会をイベント企画などを通して醸成する。
- ① ②ともに一部のみの達成であった。

したがって今年（30年度）は、

① 古民家の活用に向けた基盤を作るため、古民家の修理・補修を行う。

- ・廊下の板の張替え
- ・障子の張替えの実施

② 地域の人や大学生など、多くの人が古民家に関わる機会をイベント企画などを通して醸成する。

- ・地域の人、大学生が参加できるイベントの企画
- ・大学生向けイベント情宣方法の再検討
- ・古民家を継続して、定期的に活用できる仕組みづくり

といった、昨年（29年度）の活動で未達成だった部分の達成に向けた活動を展開していく。

また、プロジェクト参加メンバーの多くが卒業したことにより、メンバー数が大幅に減少した。したがって、新規プロジェクトメンバーの募集も並行して行っていく。

6. 活動写真

○現状視察・打ち合わせ・掃除



○漆喰塗り





○萱刈り



平成29年度 Let's びぎんプロジェクト

最終報告書

プロジェクト名：作ろう・残そう・岩手の自然史

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

氏名	学部	学年	備考
押切智博	農学部	3	代表
中川裕太	農学部	4	副代表
北島ちひろ	農学部	1	
相澤葵	農学部	1	
高橋貫生	農学部	1	
太田侑奈	農学部	2	
佐々木絢菜	農学部	2	
高橋彩月	農学部	2	
及川真道	農学部	2	
井盛貴博	農学部	2	
富山百恵	農学部	2	
斎藤優気	農学部	2	

2. 活動目的

〈活動の背景〉

岩手県には豊かな自然があり、カモシカやツキノワグマ、イヌワシといった希少な野生動物が多く生息していることが知られている。しかしその一方でネズミやタヌキ、カラスといった様々な地域に適応し、広く認知された生物に対し、多くの人は自分たちの住む地域にどのような生き物が生息しているのか知る人は少ない。また本来各地域の生き物の情報を記録・保存すべき自然史博物館も県内には少なく、標本収蔵量も十分でないのが現状である。

上記の現状を踏まえ、岩手県の動物情報を記録・保存し、多くの人に身近な自然を知ってもらうことを目的とし、このプロジェクトを企画した。

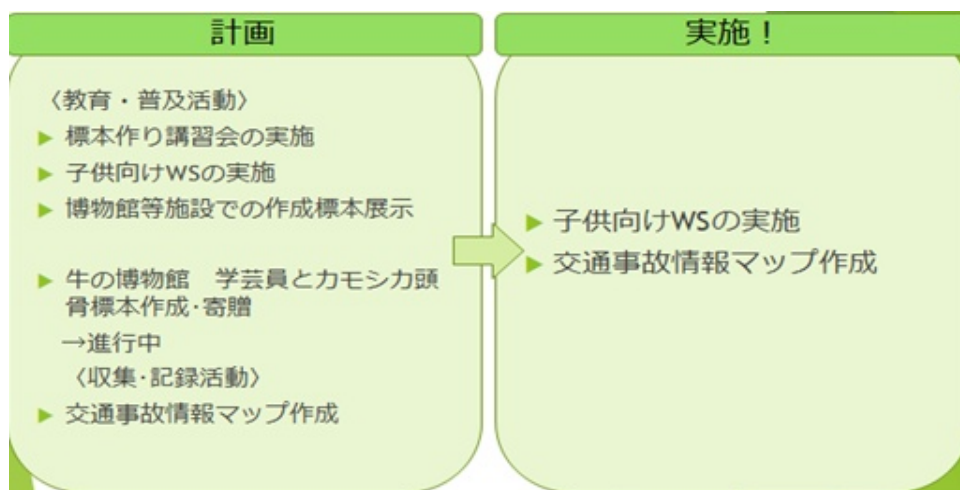
3. 活動の経過・内容

活動予定と実際の実施内容について

本プロジェクトでは活動内容を大きく2つに分類し、それぞれを①身近な自然教育・普及活動、② 野生動物の情報収集・記録活動 とした（以下①②）。

また本プロジェクトで予定していた活動と、実際に実施できた内容の模式図を以下に示す（図1）。

図1. 当初予定と実際の実施内容



①で予定していた標本づくり講習会は、場所の確保が難しい、受講者の衛生管理、ターゲットを絞り切れず広報などを実施できなかったという理由から見送りとなった。また作成標本展示は本プロジェクト期間中に達成できなかったものの、来年度標本の点数を増やし、実施予定である。カモシカ頭骨標本作成に関しては、奥州市立牛の博物館の学芸員の皆様と話し合いを行っていたが、現在県内のカモシカにパラボックスウイルス（ウシを始めとする偶蹄目に感染する病気）が流行しており、それらに感染した個体の処理方法について検討中である。

以下に本プロジェクトの年間の活動内容を示す（表1）。①の活動としてこどもWS（ワークショップ）を計4回、②の活動として、10月より動物の死体情報を株式会社盛岡清掃センター様から頂き、盛岡市内での動物の事故状況を記録した。

表1. 実際に行った年間の活動内容

月	日	活動内容
7月	17日	南三陸町 WS
10月	12日	動物死体の収集・記録開始
10月	21日	不來坊祭での展示
11月	3日	牛の博物館 WS
11月	19日	盛岡ヴァンダーカンマーWS
1月	20日	南三陸町ラムサールシンポジウム
2月	4日	鳥の仮剥製講習会(参加)
2月		ロードキルマップの作成

動物死体の
記録・収集

4. 結果報告

〈こどもWSの実施〉

南三陸町WSでは南三陸で採集した海藻を用いて、南三陸の海の生き物と海藻との関係を知ってもらうための工作を行った。詳しい人数などは不明だが、多くの市民の方が参加していった。牛の博物館WSでは奥州市の自然を学んでもらうために、実際の化石から型取りしたレプリカづくりや、奥州市で採集した植物標本を使った工作を実施し、約300人の市民の方が参加していった。盛岡ヴァンダーカンマーWSでは子供向けに化石のレプリカづくり、大人向けに化石の色塗り体験を行った。南三陸町ラムサールシンポジウムでは海藻とベビーオイルを用いたハーバリウム風工作を行った。

〈ロードキルマップの作成〉

動物の交通事故情報を基にGIS（地理情報処理システム）で位置情報を表示させ、ロー

ドキルマップ（交通事故場所マップ）を作成した。

5. 今後の活動予定

〈①教育普及活動に関して〉

こども WS はこれからも継続していくが、今回実施できなかった活動については、各課題点を改善しながら実施する予定である。

まず標本づくり講習会は、興味のある学生を中心に参加者を募っていくとともに衛生面という面で（哺乳類に比べ）比較的清潔な鳥類の仮剥製などを行うなどの工夫をする。カモシカ頭骨標本に関しては、これからも牛の博物館の学芸員と相談を重ねる必要がある。

〈②収集・記録活動について〉

現在情報を集めているのは盛岡市の中心付近にある県道のみであるため、今後は県全体の道路関係者に呼びかけ、現在よりも広い範囲での情報収集に努めていく。また得た情報の利活用として動物の横断標識設置などが考えられるが、得た情報の用途についてはメンバーと相談して、利活用するという意見が多い場合はその方向性を検討する必要がある。

6. 活動写真

南三陸町 WS



牛の博物館 WS



盛岡ヴァンダーカンマー

